チンを打った人は「ほかの病気」にもすかった

ワクチンはコロナ禍における救世主のはずだった。しかし、すでに国民の82%が最低1回はワクチンを打っているにもかかわらず、この夏も感染者は増えるばかり。しかも、その理由がワクチンにあるのだとしたら——

「感染者が増えてきたから旅行するのをやめました」

「もうすぐ夏休みなのに、また帰省できなくなる」

諦めの声に交じって、こんな怒りの声も聞こえてくる。

「国はワクチンを打てば大丈夫と言っていたのに話が違うじゃないですか。いつまで続くのでしょうか」

新型コロナの新規陽性者が急増し、「第7波」の到来が現実となった。7月16日には、全国で約11万人超が感染し、1日の感染者数が過去最多となった。

岸田文雄首相はその前々日、ワクチン4回目接種の対象を、医療従事者や高齢者施設などの職員およそ800万人に拡大することを表明した。

「しかし、イスラエルの研究によると、オミクロン株流行期での4回目接種による感染予防効果は接種後50～56日経過すると、3回目接種の人とほとんど差がなくなりました。つまり、感染予防効果は短期間しか持続しないのです。

それでも首相周辺は第7波を乗り切るため、効果が短期間であっても4回目接種をやるしかないと思っているそうです」（全国紙社会部記者）

4回目接種は感染予防効果が低いうえ、医療界からはこんな声も聞こえる。

「ワクチンが感染者を減らすのではなく、ワクチンにより感染者が増えたと思われます」

驚きの指摘をするのは『「副作用死」ゼロの真実』（ビジネス社）や『新型コロナワクチン 副作用が出る人、出ない人』（小学館）の近著がある医師の近藤誠さんだ。

「そもそもワクチンに感染予防や重症化予防の効果があるか疑わしい。それどころか3回、4回とワクチン接種を重ねるごとに、新型コロナやほかの病気に罹りやすくなる恐れがあるのです」（近藤さん）

ワクチンで逆にコロナに罹りやすくなるとは、一体どういうことなのだろうか。

変異ウイルスに対する備えが手薄になる

キーワードになるのが**「抗原原罪」**という免疫学の理論である。

「最初に打ったワクチンの対象とするウイルス（抗原）の記憶が免疫システムに残り、その後、ワクチンを打っても最初のワクチンが対象とした抗原に対する免疫しか強化されないことをいいます。

これはインフルエンザワクチンで見られる現象です。インフルエンザウイルスはコロナウイルスと同じRNAウイルスで、変異が非常に速いため、毎年、流行を予測した新しいワクチンを打つ必要があります。

ところがインフルエンザのワクチンを打っても、最初に打ったワクチンでできた抗体だけが増えてしまい、変異したウイルスに対する抗体は上がらない。そのため、その年に流行するインフルエンザに罹ってしまう。これは抗原原罪の作用が働いたためと考えられます」（近藤さん）

旧約聖書のアダムとイブが禁断の木の実を食べてしまった罪を「原罪」と呼び、人間はその罪を背負って生きるとされる。免疫システムにも、

厚労省のデータ集計方法変更で「未接種者」が急に減った

期間	新規陽性者の総数	未接種	2回接種	3回接種	接種歴不明
4/4～4/10	23万6213人	**7万6877人**	9万226人	3万1964人	**3万7146人**
集計方法変更 4/11～4/17	22万8013人	**3万3207人**	8万1015人	3万5303人	**7万8488人**

「未接種者」が大幅に減った！　「接種歴不明者」が大幅に増えた！

（厚労省の発表資料より）

各期間中の陽性者の数。4月11日以降、厚労省は接種歴があるのに正確な接種日時などがわからないため「未接種」としてきた陽性者を、「接種歴不明」に分類。未接種者の陽性者数は減少した。

総力特集 コロナの時代に私たちは薬とどう向き合うべきか

衝撃事実

ワクチンが「コロナ」にも罹りやすい

イギリスではほとんどの年代で3回接種群が約3倍もコロナに感染！

1種類を繰り返し打つとかえって逆効果!!

そうした「原罪」が刻み込まれているというわけだ。

抗原原罪はコロナのワクチンでも見られるという。

「コロナでは、2回目も3回目も4回目も初回接種と同じワクチンを打っています。すると初回のワクチンが目標とした免疫細胞はひたすら強化されますが、変異ウイルスに対する備えが手薄になります」（近藤さん）

このロジックを裏付けるデータがある。本誌'22年6月30日号は「ワクチンを打った人の方が新型コロナに罹りやすかった」の記事でそのデータを伝えた。以下に概要を記す。

従来、コロナワクチンの未接種者は2回目、3回目の接種を終えた人より10万人あたりの新規陽性者数が多かった。だがそれは厚生労働省が、ワクチンを打ったが正確な接種日時などがわからない新規陽性者を「未接種」に分類したため、「接種したのに感染した人」が「接種しなくて感染した人」とみなされて、感染予防効果が実際より高く見えたためだった。

外部から指摘を受けた厚労省は今年4月11日以降、新規陽性者の集計方法をより現実に即すよう変更した。**すると、未接種と2回接種の10万人あたりの新規陽性者数にほとんど差がなくなった。**

それどころか、「40～49才」「60～64才」「65～69才」「70～79才」では、未接種よりも2回接種の方が、新規陽性者数が多くなる逆転現象が生じたのだ。

厚労省の〝改ざんデータ〟に疑義を呈した名古屋大学名誉教授の小島勢二さんが、さらなる独自試算を報告する。

「厚労省の新たな集計方法で『接種歴不明』に分類されるようになった人たちも詳細がわからないだけで、接種したことは間違いありません。そうした人を『接種者』にカウントして独自に試算すると、ワクチンを2回接種した人の感染予防効果がマイナスになり、かえって感染しやすいという結果になりました。

接種後の時間の経過とともに感染予防効果がなくなることならまだしも、効果がゼロでとどまらずマイナスに陥ったのは憂慮すべき事態です」

その事実に対し、当然、「ワクチンを打つと安心して、感染予防対策がおろそかになるのでは」という声もある。

だがウェブサイト「Think Vaccine」がワクチン接種者と未接種者それぞれ408人に行ったアンケートでは、感染対策の取り組みに大きな違いはなかった。

「接種者、未接種者ともに3密回避などの感染対策を緩和したのは3割程度でした。この結果からは、ワクチン接種後に気が緩んで感染したとは考えにくいと思います」（小

島さん）

海外でも同様の報告がある。イギリス健康安全保障庁は、今年3月6日から3月27日に発生した10万人あたりの新規陽性者を、年代別に「3回接種群」と「未接種群」に分けたデータを公表した。

それによると、**未接種者が多い18才未満を除くすべての年代で、3回接種の方が未接種よりも3～4倍ほど新規陽性者が多かった。特に60～69才は3回接種した新規陽性者2814人に対し、未接種はわずか572人と大きく差が開いた。**

「この感染のほとんどはオミクロン株でした。ワクチンを打てば打つほどコロナに感染しやすいと思われる状況で、4回目接種を進めたらどうなってしまうか。不安が募るばかりです」（近藤さん）

ワクチン接種とともに「超過死亡」が増えていることも気がかりだ。

超過死亡は、過去の統計から見込まれる国全体の死者数の推定値を、実際の死者数がどれだけ上回ったかを示す数値のこと。昨年1年で前年よりも約6万人増加し、今年の2～3月にはさらに急増した。

「東日本大震災が起きた'11年の死者の増加数（約5万5000人）を上回る人が亡くなったことは驚きです。しかも'21年のコロナ死は約1万7000人にとどまるので、〝超過死亡の原因はコロナに罹ったことそのもの〟であるとは考えられません。

超過死亡はワクチン接種を開始した'21年2月から観察され、2回目の接種がほぼ終了した11月まで続いたことから、接種後にアナフィラキシーショックや免疫の暴走などの副作用で多くの人が亡くなったと考えられます。**厚労省は頑なにワクチン接種と死亡の因果関係を認めないが、超過死亡のほとんどはワクチンの〝隠れ副作用死〟であると推察されます**」（近藤さん）

接種開始から6月24日まで、ワクチン接種後の死亡として1770件が報告されている。しかし、実際はもっと「副作用死」が多いかもしれないというのだ。国はワクチンについて徹底調査する必要がある。

免疫力低下で悪性リンパ腫に

ワクチンを打つとコロナだけでなく、ほかの病気に罹りやすくなるとも指摘されるが、これにも抗原原罪がかかわると近藤さんは説明する。

「免疫細胞のキャパシティーはだいたい決まっています。そのためコロナワクチンを打ち続けると、初回ワクチンが目標とした免疫細胞だけが強化され、ほかの病原体に対抗する免疫細胞が少なくなります。つまり、**コロナ以外の病気にも罹りやすくなると考えられます。コロナワクチンを接種すると自然の抗体産生が妨げられるうえ、全般的な免疫システムが弱体化するとされます**」（近藤さん）

小児がんや難治性血液病を専門とする臨床医でもある小島さんは、コロナとは別の感染症が増加することを心配している。

「子供の頃に水疱瘡（みずぼうそう）を起こすウイルスに感染すると、そのウイルスは大人になっても神経に沿って潜伏し、免疫力の低下とともに再活性化して、神経に沿って痛みのある赤いぶつぶつが出ます。それを『帯状疱疹』といいますが、最近、患者数の増加が報告されています。

カンジダという真菌（カビ）が口の中で繁殖する口腔カンジダ症の患者も増えています。帯状疱疹、口腔カンジダ症はともに免疫力の低下で生じやすく、ワクチン接種で免疫力が下がった人が増えたことが懸念されます」（小島さん）

小島さんは「EB（エプスタインバー）ウイルス」の動向にも注目する。

「EBウイルスによる感染症は多くの日本人では20才までに罹患し、その後は、リンパ球に無症状で潜伏感染します。しかし免疫力が低下すると再活性化し、悪性リンパ腫や血球貪食リンパ組織球症などの重病をもたらします。

驚いたことに厚労省の発表したコロナワクチン副反応のリストには10人の悪性リンパ腫と14人の血球貪食リンパ組織球症が含まれ、実際に6人がEBウイルスの再活性化が関連すると思われる病気で亡くなっていました。これらは、ワクチンによる免疫力の低下が、関連している可能性があります」（小島さん）

コロナワクチンの闇が深まるなか、岸田首相が打ち出した「4回目接種」に近藤さんは異を唱える。

「特別な一種のワクチンを繰り返し打てば打つほどほかの免疫細胞が抑制され、オミクロン株や別の病気に罹りやすくなる可能性があります。加えて重篤な副作用のリスクがあるワクチンを安易に国民に打たせるべきではありません。

オミクロン株は感染力が高いもののほとんど重症化しないとされるので、多くの人は気にする必要はありません」（近藤さん）

ワクチンに限らず、〝異物〟を体に入れることに慎重になるべきだと近藤さんが続ける。

「ワクチンは『劇薬』に分類されるものであり、天然痘や小児まひなどよほどの脅威に対するものでなければ打たない方がいいと私は考えています。同様に多くの薬も免疫力を落として重症化を進める恐れがあり、よほどの重病でなければ服用しない方が健康でいられます。

人間の体にはすばらしい免疫システムが自然に備わっています。さらなる感染や重症化を予防するためにも、オミクロンレベルのウイルスには自然に感染して抗体をつくっておく方がいいでしょう」

ワクチン接種は「第7波」を食い止めるカギとなるのか、それとも――

ワクチンを打った方が罹りやすい

年代	3回接種群（人）	未接種群（人）
18才未満	1454	1711.7
18～29才	3118.8	941.6
30～39才	4324.7	1085.6
40～49才	3957.8	955.3
50～59才	3303.4	779.8
60～69才	2814.9	572.8
70～79才	2161.5	532.1
80才以上	2023.7	775.6

イギリスの健康安全保障庁の報告をもとに作成

イギリスで3月6～27日に発生した10万人あたりの新規陽性者数。18才未満以外では、3回接種群の方が、3～4倍ほど陽性者が多い。

その体調不良の原因はワクチンかもしれない。

写真／時事通信社、Getty Images